辞書の活用

koberyo1

　わたしが早稲田実業に入学する時のこと、塾の恩師であるT先生は、「自力で勉強するには辞書が必要になる」ということで、国語辞典、英和辞典のそれぞれを求めに神田に一緒に行ってくれる約束をしてくれた。神田に行ったのは入学前の年が開けての一月頃であったかと思う。

　辞書といっても当時のわたしは、それをどのように使いこなすのか、その知識も能力もなかったが、意味もわからず神田に行くことにした。何人かと一緒に行ったかと思うが、誰がそこに同行していたかは、もはや記憶にない。

　京王電車で「初台」から新宿まで乗り、それから市電に乗り換えた。新宿の「二幸前」から神保町行きに乗る。乗ったのは、チンチン電車である。

　「新宿三丁目」、「四谷」、「麹町四丁目」などの各停留所を市電は走る。やがて「半蔵門」の皇居の堀を見ながら右折すると「九段前」を通過し、靖国神社前をも走り、やがて「神保町」に到着する。新宿から市電で三十分くらいだったろうか。

　神保町の停留所を下りると、そこは神田の書店街だった。東京堂や岩波書店をはじめ、新本屋や古本屋が軒をつらね、本が店からあふれんばかりになっている光景は壮観だった。これほどのたくさんの本が商われているのをみるのは、生まれて初めての体験だった。

　とにかく本に対して胸の躍る年代であったから足どりも弾んだ。わたしはポケットの中の財布を何度も確認しながら、「三省堂」にT先生を先頭にみんなで入って行った。

道路を挟んで「神田日活」という映画館と三省堂と向かい合っていた。当時、神田日活は大きな映画館で、派手な看板を掲げていたことを思い出す。

三省堂の店内には、国語、英語などの辞書が山積みされていた。大きいものや小さいものなど、色々な辞書があり、目移りしてしまいそうだった。

先生が言われるには、「辞書」といってもその形態だけでも大小さまざまなものがあり、その内容によってもまた種類は千差万別、一つは語や言葉の説明を主とするものであり、俗にいう国語辞典、漢和辞典、英和辞典などのことである。

辞書をフルに使いこなす為には、持ち運びも考慮して中型のかさばらないものが良いという指示もあって国語、漢和、英和の三つの種類のお辞典を購入した。

これらは今日まで使用してきたが、加齢とともにわたしのいまの視力では見えにくくなっており、ブックオフ旺文社発行の国語辞典の大活字版を漢字事典とともに買ってきた。

これまで使ってきた国語辞典はボロボロになってしまった。ビニルテープで本の型を補修しながら天眼鏡を活用しながら利用して活用してきた。

しかし、視力の減退によって辞書を引くのに時間がかかるようになってしまい、ひどく疲れてしまうので、長いこと活躍してくれたこの辞書はわたしの宝の一つだが、そばに置いて側近として侍らせ、わたしの心の支えとすることにした。

最近、電子辞書が時々、テレビショッピングなどで紹介されて

いるが、わたしは電子辞書を利用しようとは思わない。いわゆる、ムカシ人間なのである。

　たしかに電子辞書が発明され、便利になったかと思う。しかし、問題はないだろうか？

　利便性だけを取り上げればそれは申し分のない発明ではあるけれど、実際電子辞書を手にとった印象では、横への発展や立体的な使い方ができず、味も素っ気もないと感じるばかりである。

　具体的に何がいいたいかというと、たとえば本屋にいき、店内を逍遥していると、ふと手にとった書籍の一節がことの他おもしろかったり、そのおもしろさが引き金となってさらに関連性のある本と偶然出会い、そこからつい逸脱的に発展していって思いも寄らぬ発想を得ることがある。

　が、昨今のインターネットなどの検索やネット書店でレファランスする本などでは、そうした知的醍醐味をともなった出会いというものが、ほぼ皆無なのである。

　電子ではない紙の辞書にはそういった、ふくらみゆく知的好奇心を最初から刺激するようなものが最初からそなわっているような気がする。

　いかに利便性にすぐれていようと、いまだにわたしは電子辞書の導入にはいくらかのためらいをもつのである。